小論文

慶應義塾大学　文学部　1/2

設問Ⅰ

世界文学は圧倒的に膨大で多様であるのに、親切な道案内はない。こうした事態に対処する方法は二つある。一つは系統樹に即して一国文学を原文で読むことだが、これでは世界文学を把握できない。もう一つは各自の読みを通じてそれぞれが世界文学を作るように芋づる式に読むことだ。ＡＩの発達に頼らずに人間的に感動して読むのである。問題は「あなたがそれをどう読むか」だが、読むことに関して、原文を精読するか、テーマ、ジャンル、システムなどに焦点を合わせて遠読するか、という二項対立に陥るべきではない。また外国語を原文で読むか、翻訳で読むかという問題もあるが、これも翻訳を重視しながら多言語を学ぶべきだ。翻訳機械に任せず、人間が苦労して外国語を学び翻訳することに創造的な価値がある。世界文学を読むことは多様性と普遍性を往復運動することなのだ。

設問Ⅱ

【解答例１】

人間にとって文学を読むとは、耐えがたい苦難にあっても腐らずに、尊厳をもって生きるとはどういうことかと問うことである。

そう考えたのは、韓国の作家ハン・ガンの『すべての、白いものたちの』を読んだからだ。この作中に「白く笑う」とある。著者は、韓国特有の表現だろうと断った上で、それは静かに耐えながら、笑っていようと努めることだと書く。韓国語の表記は私には理解困難で異質なものだが、そこに人間のぎりぎりの尊厳が賭けられていることは伝わる。この言葉が他のパッセージ「しないでおねがい」と重なるとき、翻訳語であっても、深い悲しみは読み手の中で普遍的に共鳴可能だろう。これは著者の母親と、早産で生まれて二時間で死線を越えていった著者の姉をめぐる物語である。体内に宿した命が眼前で消えていく。だが、どれほどの苦しみに打ちのめされても、人間は尊厳をもって生きようとする。文学はそんな人間の魂に形を与えるのである。

【解答例２】

昨年亡くなったポール・オースターは私が原文で読んだことのある数少ない作家の一人だ。彼の文章は余計な修飾を極力削り、私の語学力でも容易に追えるぐらい単純な構造のセンテンスが端正に並んでいる所に特徴がある。スタイリッシュと形容されるその文体はよく練られたプロットと相まって、美しい建築物を連想させる物語世界を形作っていた。それは小説家でありながら、詩作もやっていた彼自身の志向に因るだろう。

このように文体を含めて作品を味わうのは翻訳ではやはり難しい。しかし語学力に限界があれば、原文の一つひとつの意味を理解することはおろか、文体を味わうことすら難しくなる（その意味でジョイスやピンチョンなどは私には到底読めない）。したがって筆者がいうように、翻訳か原文かの二者択一ではなく、作家や作品によって使い分けたり、場合によっては両方を照らし合わせたりしながら読む他ないのだと思う。

© 河合塾　2025 年

【解答例３】

筆者は、世界文学を読むことは、普遍性と多様性の間の往復運動であると言う。この言葉で思い出したのが、ロシアのノンフィクション文学である『戦争は女の顔をしていない』だ。第二次大戦に従軍した女性たちの証言を集めた中に、ある女性兵士がイヤリングを身につけていたというエピソードがある。

平和な世界であれば、イヤリングを身につけることは日常のささやかな喜びである。しかし自らの命を危険にさらし、また、他者の命を奪うことが常態化した戦場では、イヤリングが女性の自分らしさを支える。装うという行為の身近さと、戦場という状況の特殊性の間で、女性兵士が何を感じていたのか、まだ私の中で答えは出ていない。

多様性が進む現代にあって、異なる世界を描いたテクストを通して他者の生に触れ、普遍性と多様性の間を行き来しながら、人間らしさとは何かと問い続けることが、私たちが文学を読む意味ではないか。

【解答例４】

文学とは、様々な背景をもつ作者が、「人間とは何か」という決して答えの出ない普遍的な問いを抱えながら、個別具体的な人間と社会の姿を凝視し表現する知の営みである。それを読むことはその普遍性と多様性の往還に参加することだ。十一世紀の日本で書かれた『和泉式部日記』と二〇世紀のアメリカで書かれた『風と共に去りぬ』は、時代も社会・言語文化の背景も大いに異なる作品である。しかし、どちらも喪失体験を通じて自分を取り巻く世界が一変し、新たな相貌を見せるという人間の不変性に迫るものだ。だからこそ私たちはそれらを読み継ぎ、各々の作品に固有の視点・感性に触れることで、自らの人間観を相対化し多様性に拓かれるのであろう。

現在の世界は敵と味方を二分する二項対立的な価値観に支配され、平和が脅かされつつある。翻訳を通じて膨張し多様化する世界文学に触れることは、この流れに抗し、共生を志向する知性をもたらしてくれるはずだ。

© 河合塾　2025 年